子どもの貧困に、本質的解決を。

Learning for All

NPO法人Learning for All

～「子どもの貧困の実態と課題」～

目次

1. 団体概要

2. 取り組む課題
   1. 子どもが抱える困難の複層性
   2. 「子どもの貧困対策」が抱える課題

3. LFAのアプローチと意義の再検討
   1. 1人に寄り添う現場作り
   2. 日本全国の子どもを支える仕組み作り

4. 終わりに

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

Learning for All

Learning for Allは「子どもの貧困」解決をミッションとし、子どもへの包括支援を行っています。

団体名

特定非営利活動法人
Learning for All
（2010年活動開始、2014年法人設立）

実績

支援した子ども数	のべ**9,500人**以上
ボランティア参加者数	のべ**2,500人**以上
連携自治体数	のべ**10自治体**（葛飾区、板橋区など）
表彰	• 東京都「北区改革プランベスト1」受賞（'11） • 第5回エクセレントNPO大賞受賞（'18） • Forbes JAPAN 30 under 30に選出（'18）

代表

代表理事
李炯植

- ✓ 東京大学大学院教育学研究科修了
- ✓ 貧困地域で育った原体験から、子どもの貧困問題解決に大学在籍時から取り組む
- ✓ 一般社団法人 全国子どもの貧困・教育支援団体協議会理事

活動内容

6~18歳の子どもへの包括的な支援を実施

学校内学習支援
（小学校4年～中学校3年）

公民館学習支援
（小学校4年～中学校3年）

中高生の居場所拠点
（中学校1年～高校3年

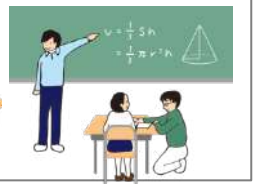
小学生の居場所拠点
（小学校1年～6年）

子ども食堂
（小学校1年～高校3年）

その他の支援

- **家庭訪問支援**
- **家庭への宅食支援**
- **保護者の相談支援**
- **オンラインでの学習支援**

■支援エリア
・東京都葛飾区、板橋区
・埼玉県戸田市
・茨城県つくば市



Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

目次

Learning for All

1. 団体概要

2. 取り組む課題
   1. 子どもが抱える困難の複層性
   2. 「子どもの貧困対策」が抱える課題

3. LFAのアプローチと意義の再検討
   1. 1人に寄り添う現場作り
   2. 日本全国の子どもを支える仕組み作り

4. 終わりに

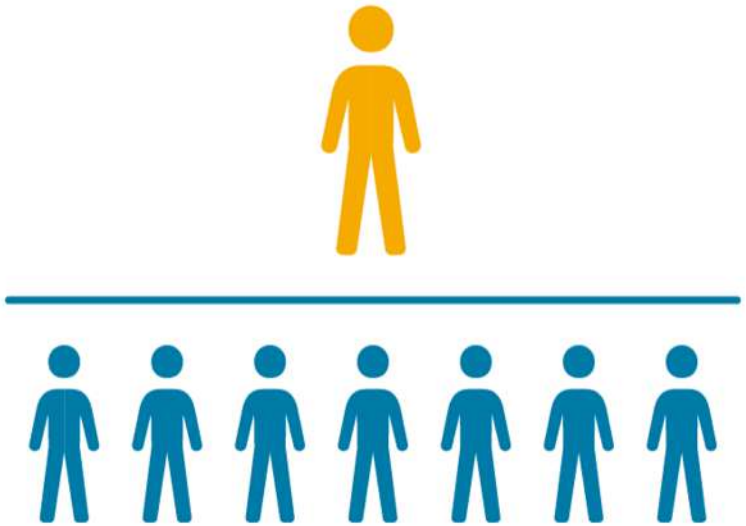
Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

Learning for All

解決したい課題は、子どもの「貧困」

日本の子どもの７人に１人が「貧困」状態にあります。

また、ひとり親世帯に限ると2人に１人が貧困状態にあり、
これはG７の中では最悪の数字となっています。



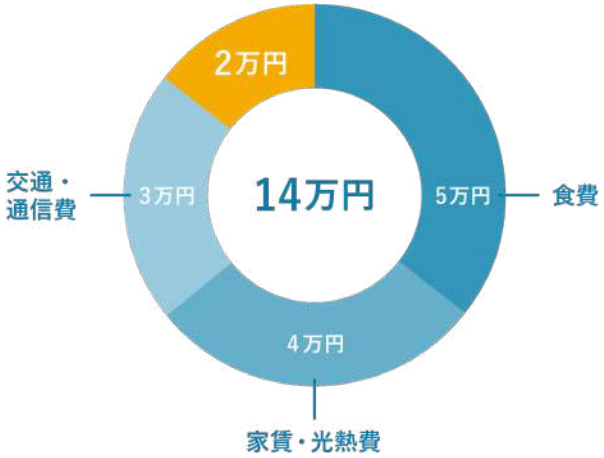
Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

Learning for All

「子どもの貧困」の定義とは？

日本でいう「子どもの貧困」とは、相対的貧困のことを指し、
その数は全国約260万人にものぼります。

相対的貧困は、「年間の手取りの中央値の半分以下で暮らしている状態」と定義されています。
これは例えば親子2人世帯（ひとり親世帯）の場合、年間約170万円、つまり1か月約14万円で暮らしている状態です。



Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

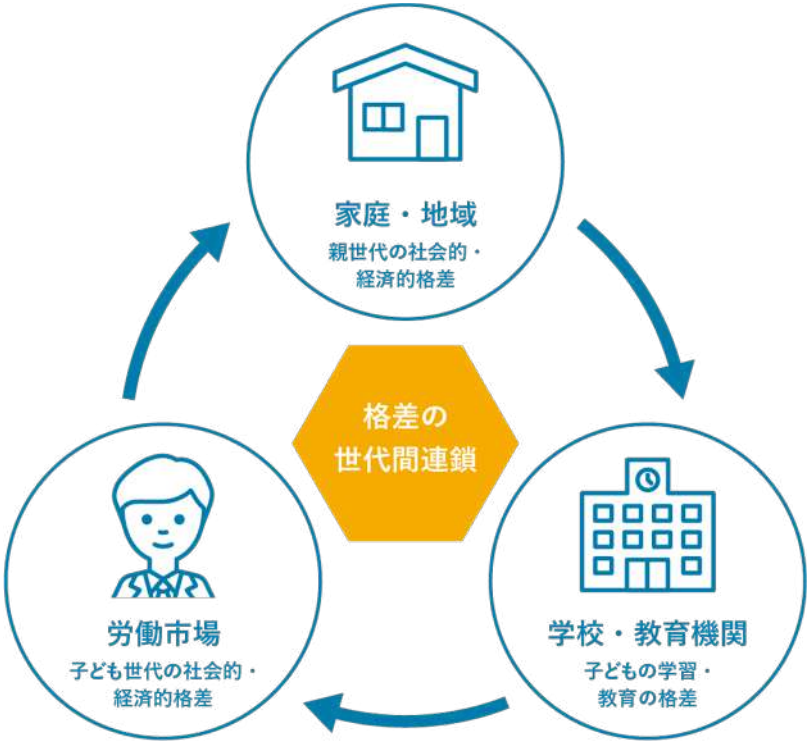
Learning for All

「子どもの貧困」を放置すると・・・

子どもの貧困を放置すれば、格差の世代間連鎖を引き起こし、

わずか1学年あたりでも

経済損失は約2.9兆円、政府の財政負担は1.1兆円増加すると言われています。



Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

Learning for All

経済的な貧困だけが、問題ではありません・・・

2012年以降、不登校率が上昇し続けています。

特に中学校での増加が顕著です。

小学校・中学校における不登校児童生徒の割合の推移

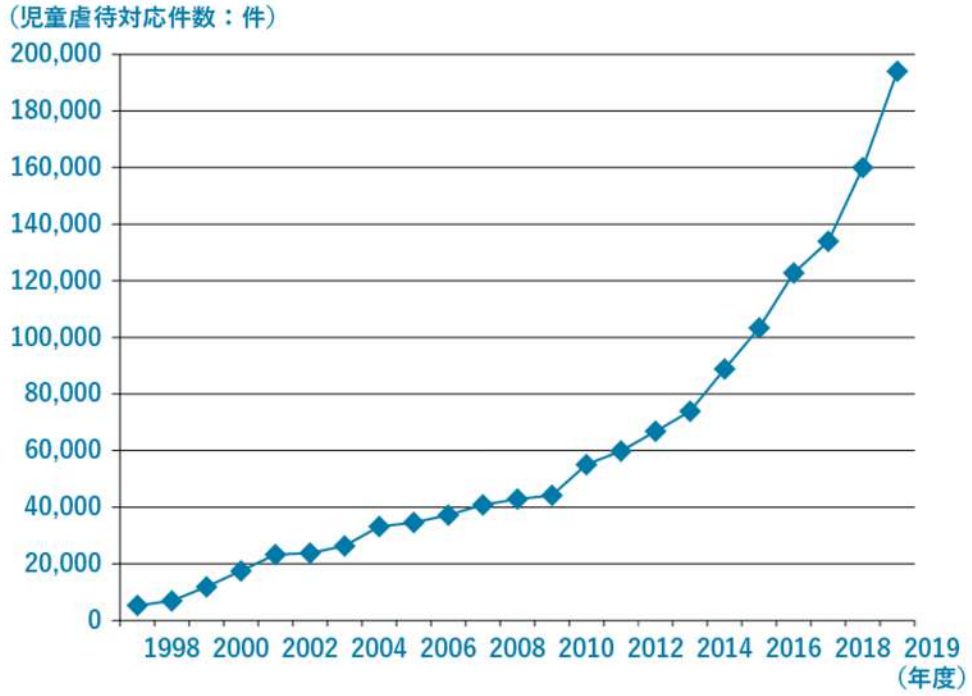
Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

Learning for All

児童虐待相談対応件数は、年間19万件以上。

特に2009年以降、右肩上がりに増加を続けています。

児童虐待件数の推移



Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

Learning for All

日本語指導が必要な外国籍の子どもも増え続けています。

公立学校における日本語指導が必要な外国籍の児童生徒数（左図）
及び日本語指導が必要な日本国籍の児童生徒数（右図）

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

Learning for All

国や自治体・教育機関は、十分な支援を提供していないのですか？

困難を抱える子どもたちに対しては、

「学校」「地域」「家庭」の様々な場面で、

多様な主体がサポートを行っています。

しかし、支える大人側にも、直面している課題・困難があり、

それゆえに、サポートの網目からこぼれ落ちてしまう子どもたちがいるというのが現状です。

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

2. 取り組む課題
～子どもが抱える困難の複層性

Learning for All

子どもたちを支援している大人たちにも、

それぞれの立場で様々な制約があり、

十分な支援の提供が難しい実態があります。

家庭（行政による支援）

-人手が足りない。

-学校やSSWとも情報交換できればと思うが、最近は**個人情報の関係で連携が一層難しくなった**ように思う。

-保護者支援が主なため、子どもの様子は情報が入らないことも…。

-**子どもの支援現場がどこにあるか、どう繋いでいいか**わからない…。

学校

-**時間が足りない、人手が足りない。**

-相談するにも**個人情報をどこまで伝えていいのか**…。

-**ケースごとに相談先も違う**し、どこに相談したらよいのか…。

-他機関との連携も大事。連携先の情報がもっと欲しい。

-**学校からの申請がないと動けない**…。

地域（学校外の支援）

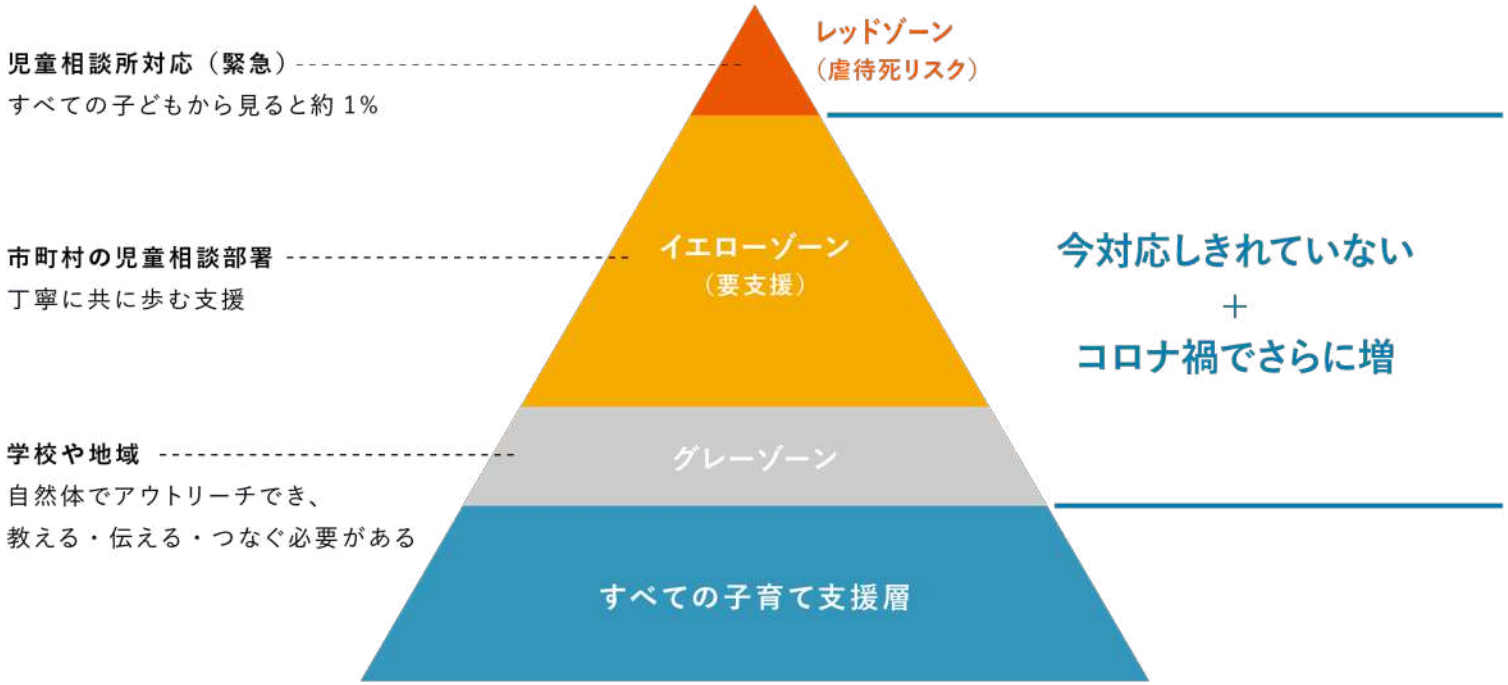
-**他の関連機関ともっと子どもの様子を共有できれば、**より良いサポートができるのに…。

-気になる子がいても、どこに相談したら良いのか…。

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

Learning for All

また、特にリスクの高い“レッドゾーン”の子どもたちと、
問題のない子の間に位置する
“イエローゾーン”に多くの子どもたちが存在し、
そのボリュームゾーンへの支援が特に足りていません。



※大阪府立大学　山野則子教授「学校・家庭・地域の教育力を機能させる仕組み作り～学校プラットフォームの実現に向けて～」を元に改変

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

Learning for All

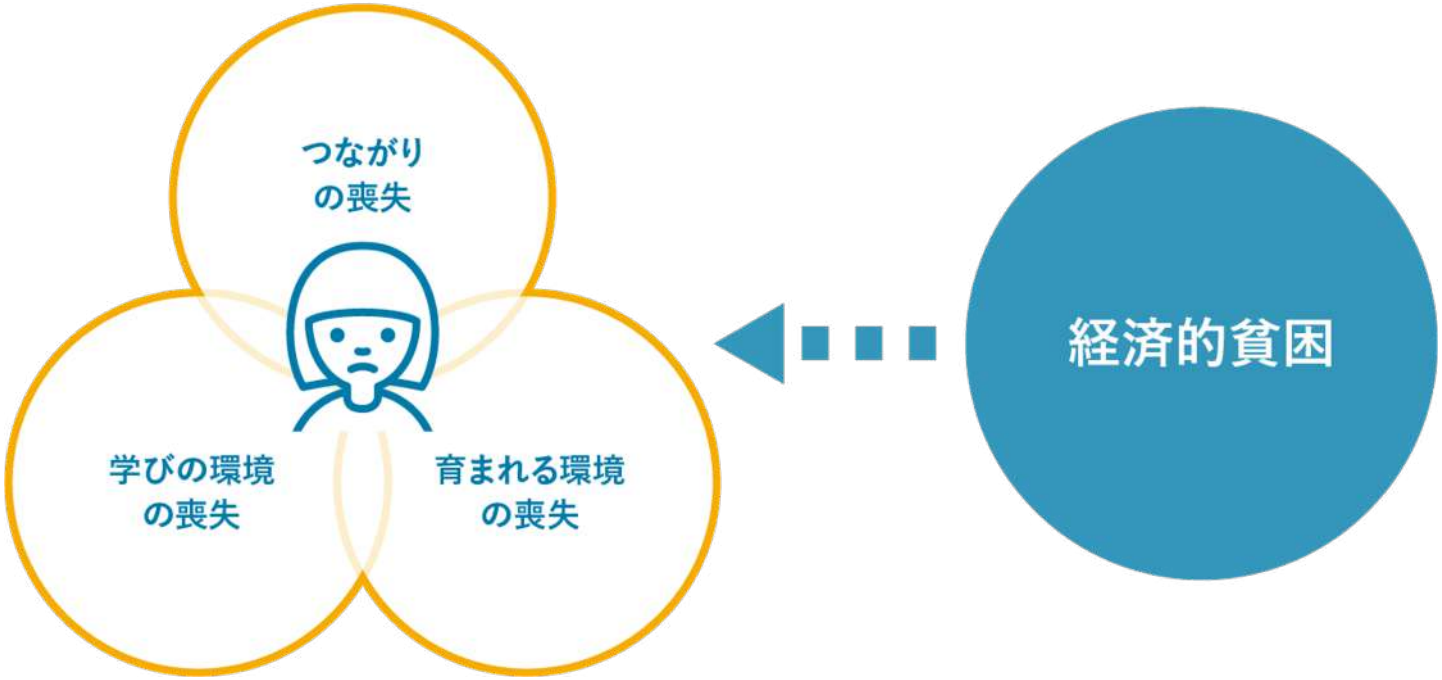
このように、むしろ経済的な基盤がないことを背景として、

本来子どもたちの健やかな育ちに必須である

「つながり」「学びの環境」「育まれる環境」を喪失しやすい

ということが、

問題を複雑にし、自立を阻む大きな障壁となっています。



Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

2. 取り組む課題
～子どもが抱える困難の複層性

Learning for All

つながりの喪失

貧困・不登校・虐待などの様々な事情から、家庭や学校の中で安心できる居場所がない。不安なことやしんどいことを相談する相手もおらず、自分を支えてくれる友人や、NPO等の支援先とのつながりもないため、孤立してしまっている。

学びの環境の喪失

学校以外に学習する環境がなく、自分に適したペースと方法で学びを進めることができない。その結果、学習におけるつまずきを重ね、大きな学習の遅れを抱えてしまっている。さらに、自信も失い、自分の可能性を信じて将来の進路や夢を描くことができない状態に置かれてしまっている。

育まれる環境の喪失

虐待を受けたり、不適切な養育環境に置かれたりしている。そのため、心地よい環境で適切なケアを受ける、基本的な生活習慣を身につける、めいっぱい遊ぶといった「当たり前」の機会が得られていない。こうした状況では心身を成長させることができず、学習以前の段階で様々な課題を抱えてしまっている。

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

2. 取り組む課題
～「子どもの貧困対策」が抱える課題

Learning for All

子どもの貧困問題の解決アプローチには大きく二つの考え方があります。子どもを投資対象と考える、「投資アプローチ」。子どもの幸福を目指す「well-beingアプローチ」。LFAでは後者を支援の基底に据えています。

投資アプローチ	Well-beingアプローチ
• 子どもを経済成長のために有用な投資対象として考え、子どもの貧困を放置しておくのは経済損失であるという視点からのアプローチ(志賀,2018:115)。 • 投資アプローチによる貧困対策が前景化していくことにより、①投資に値する子どもの選別とこれによる社会への影響②無用な世代間分断の生起という2つのネガティブな影響が懸念される。 • 特に①により、投資に値しない子どもを生み出してしまい、子ども本人が社会の要請する「能力」を持つか否かで排除されうる可能性が生じてしまう。	• 「投資アプローチ」に対して志賀は「well-beingアプローチ」を提唱し、子どもの「幸福」を子どもの貧困対策の目指すべきものにすべきと指摘している。 • その上で、子どもの貧困問題は「子どものwell-beingを追求する権利の不全および自由の欠如」(志賀、2018:121)と捉え、そうした権利や自由の保証こそ子どもの貧困対策において保証すべきだと述べている。 • 投資効果に基づいて、子どもが選別されるのではなく、子どもの人格・発達を目的とし、多様な個人のあり方を尊重する。

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

2. 取り組む課題
～「子どもの貧困対策」が抱える課題

Learning for All

「子どもの貧困」が社会的な問題として認知されて以降、主として生活困窮者自立支援法に基づく学習・生活支援事業として「無料学習支援」教室が全国に広がりました。その一方で、学習支援業界に「市場化」が起こり、クリームスキミングや学力偏重の支援が広がっています。

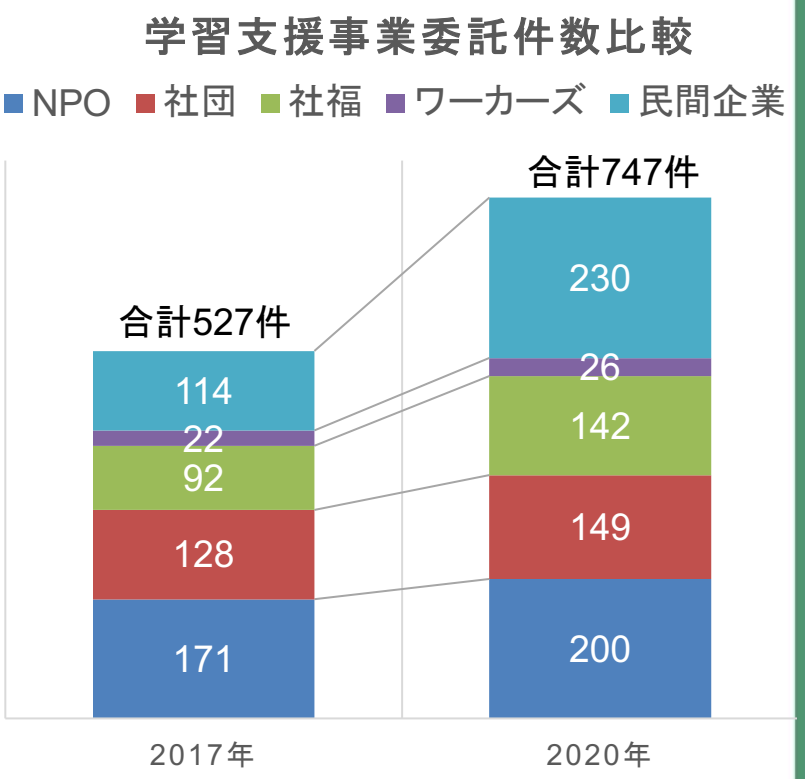
市場化により発生している3つの弊害

①学力支援が強調され事業の福祉的な価値が軽視される

- ✓ 貧困・虐待・不登校など様々な状況下で、学力のみならず自己肯定感や人生への希望を失っている子どもも多い。
- ✓ 学習支援事業では、**学力支援のみならず、生活面のサポート、文化的な交流、安心安全な居場所の提供などの包括的な支援が必要**である。
- ✓ 市場化によって、子どもの課題が学力低下や進学機会の減少などに矮小化されることで、 結果的に学習支援事業の**福祉的な価値が軽視**されている。

②市場化が事業者間の連携を阻むことで、子ども支援の効果的なノウハウが社会に蓄積されない

- ✓ NPOなどの子ども支援団体において、学習支援事業等の受託が受けられない場合、団体存続にも影響するため、**団体同士の競争が激化**していく。
- ✓ **本来であれば業界全体での学び合いをすることが子ども達を支える上で重要**だが、競争を強いられる構造により、各団体の素晴らしい実践やノウハウの蓄積・共有がなされていない。



（2020年10月厚労省調べ）

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

2. 取り組む課題
～「子どもの貧困対策」が抱える課題

Learning for All

「子どもの貧困」が社会的な問題として認知されて以降、主として生活困窮者自立支援法に基づく学習・生活支援事業として「無料学習支援」教室が全国に広がりました。その一方で、学習支援業界に「市場化」が起こり、クリームスキミングや学力偏重の支援が広がっています。

市場化により発生している3つの弊害

③学力支援への傾斜が生むクリームスキミング

- ✓ 学習支援の価値は学力向上や進学率だけには還元され得ない。虐待や不登校など複雑な状況の中で、大人や社会に対して信頼感を持てなくなった子どもが、**学習支援の現場で社会とつながり直し、信頼できる大人との関係性を築き、その中で自己肯定感を高めていく**。
- ✓ その結果、将来の目標を持てるようになり、社会参加への意欲を高めていくような効果もある。**こうした支援には時間がかかり、その効果も可視化しづらい**。
- ✓ 市場化が進み、価格競争が加速化すると、**より効率よく、よりわかりやすい成果を出す事業者が評価される可能性もある**。学力や進学率などわかりやすい指標が評価の対象となり、その指標達成ができる子どもたちが優先され、そうではない子どもは支援現場から淘汰される、いわゆるクリームスキミングの懸念がある。
- ✓ 様々な背景から学習意欲や進学希望を持てなくなっている子どももおり、子どもたちが学習に向き合うには、丁寧な信頼関係の構築を粘り強く続ける必要があり、学力という成果はすぐには出にくい。そうした**丁寧な関わりの中にも、子どもの貧困対策における学習支援の価値があるのであり、市場化によってそうした営みは効率の悪いものとして、子どもたち諸共淘汰されてしまう可能性がある。**

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

目次

Learning for All

1. 団体概要

2. 取り組む課題
    1. 子どもが抱える困難の複層性
    2. 「子どもの貧困対策」が抱える課題

3. LFAのアプローチと意義の再検討
    1. 1人に寄り添う現場作り
    2. 日本全国の子どもを支える仕組み作り

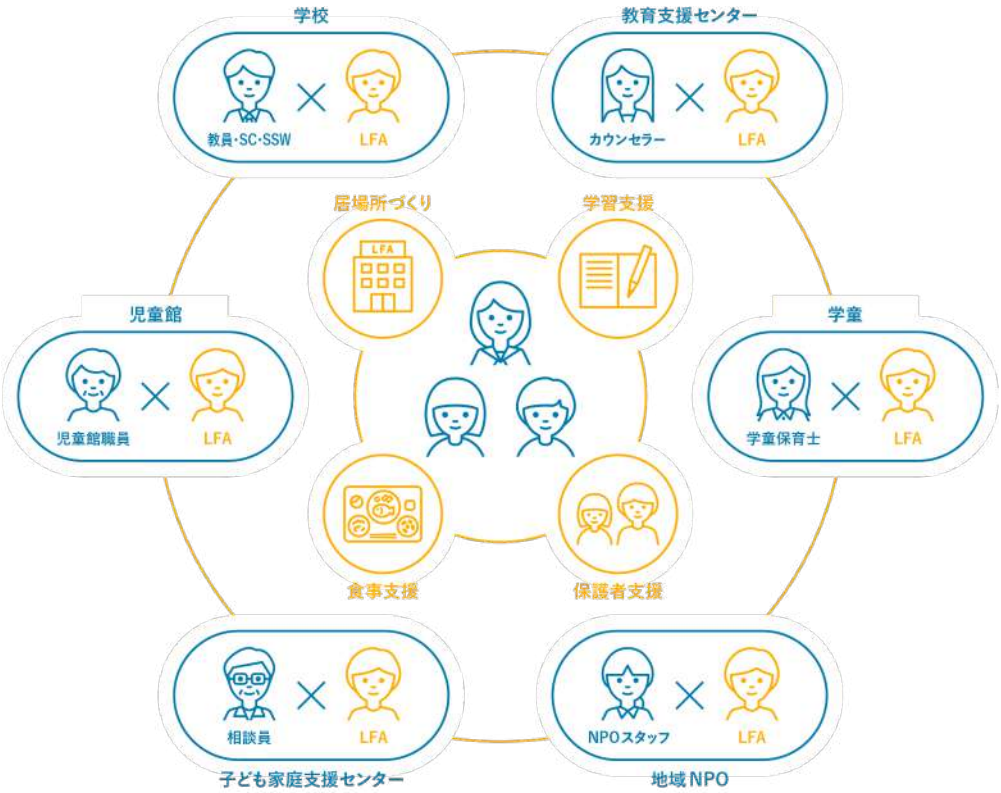
4. 終わりに

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

Learning for All

「地域協働型子ども包括支援」の実践

地域のあらゆる立場の大人たちのネットワークをつくり、
支援の必要な子どもを見のがさず、早期につながる。
成長段階に合わせ、必要なサポートを6～18 歳まで切れ目なく行う。
そんな「地域協働型子ども包括支援」を展開しています。



地域の大人の
支援ネットワーク作り

×

子どもたちへの
包括的な支援提供

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

3. LFAのアプローチと意義の再検討
～1人に寄り添う現場作り

Learning for All

子ども支援の運営 と **大人達の連携** を地域の中で進めてきました。

■主な連携・協力先
自治体の福祉部、母子自立支援や子ども相談等の公的相談窓口、小中高校、スクールソーシャルワーカー、ケースワーカー、民生児童委員、NPO、町会など

【子ども支援の運営】

- 6～18歳の子ども達を対象に、子どもの課題やニーズに応じて、柔軟に支援を変更・拡充
- ふらっと来れる居場所、登録制の子ども食堂、学習遅滞解消の学習支援など幅広く実施

【大人達の連携】

- 自治体と個人情報の授受が可能な協定書を結んでいる場合は、公的にアウトリーチを実施
- 上記ができない場合は、個人情報を侵害しないように公的組織を経由して対応。“あと一歩”周囲の大人が子どもをつなげるために動く声掛けを主に実施

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

Learning for All

「地域協働型子ども包括支援」の全国展開

現在の日本では、子ども支援に関わる人・団体の努力にも関わらず、

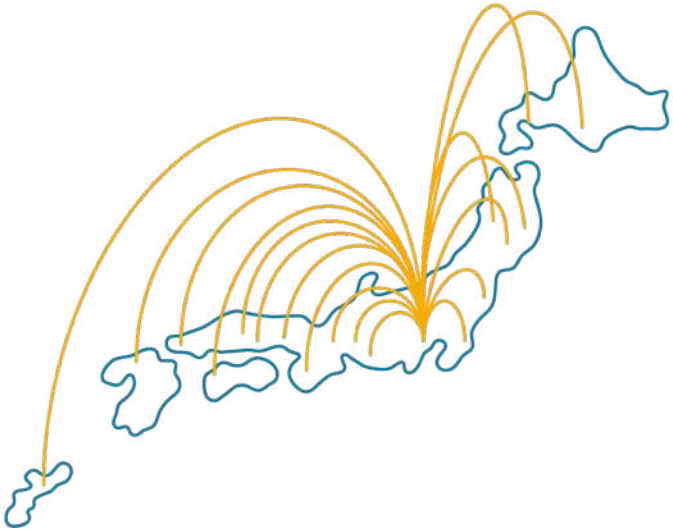
支援の「量」「質」ともにまだ足りていないのが現実です。

LFAでは、これまで培ってきた実践的な支援のノウハウを

全国の子ども支援団体や企業に提供。

日本中の子ども支援者がつながるネットワークづくりにも取り組むことで、

「地域協働型子ども包括支援」の全国展開を推進しています。



Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

Learning for All

ノウハウ展開事業

同じように「子どもの貧困」対策に取り組む支援団体・企業の方に向けて、

「LFA e-learning」「テスト・教材」「集合研修」の３つのサービスを提供しています。

LFA e-learning

動画教材を使って、子ども支援を行うために必要な研修をオンラインで受けられるサービスです。

テスト・教材DL

市販の教材では対応が難しいお子さん向けに、LFAオリジナルのスモールステップ教材をご提供しています。

集合研修

子どもとのコミュニケーション方法から組織運営まで、各団体様のニーズに合わせた研修をご提供しています。

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

Learning for All

全国の子ども支援者とのノウハウ共有プラットフォーム

子どもたちの抱えている複雑な課題に対し、
一つの専門性だけで対応できないのが「子ども支援」。
ＬＦＡでは、全国の子ども支援者がノウハウを共有し、
支え合えるオンラインプラットフォームを開設。
支援者同士のネットワークづくりにも役立てていきます。

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

Learning for All

ゴールドマン・サックス 地域協働型子ども包括支援基金

地域で子ども包括支援を実践する団体を、
資金と研修や伴走支援などの非資金的でもサポートをする助成プログラムです。

LFAがこれまで進めてきた「地域協働型子ども包括支援」を広め、
全国の子ども達を支える実践者の応援を行っていきたいと思い、
ゴールドマン・サックス様、パブリックリソース財団様のご協力を得て発足。
2021年度から3年間で17団体へ総額1.2億円（※）の資金援助を予定しています。

※助成金額は支援団体数によって変動する可能性があります

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

目次

Learning for All

1. 団体概要

2. 取り組む課題
   1. 子どもが抱える困難の複層性
   2. 「子どもの貧困対策」が抱える課題

3. LFAのアプローチと意義の再検討
   1. 1人に寄り添う現場作り
   2. 日本全国の子どもを支える仕組み作り

4. 終わりに

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

4. 終わりに

Learning for All

本日の資料は、2019年度作成した「課題の報告書」、2020年度作成した「実践報告書」が基になっております。

2019年度：課題の報告書

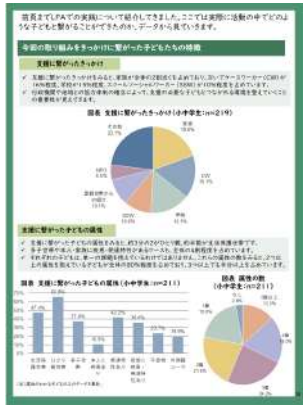
4人の子どものケースを基に子ども支援における課題を整理

全51ページ
作成にあたり、下記の方々にご協力頂きました。

- ゴールドマン・サックス
- 三菱UFJリサーチ＆コンサルティング株式会社
- 公益財団法人パブリックリソース財団
- 青砥恭（NPO法人さいたまユースサポートネット　代表理事）
- 熊平美香（特定非営利活動法人Learning for All　理事）
- 土屋佳子（日本社会事業大学　准教授）

2020年度：実践報告書

「子ども包括支援」の変化・成果をアンケートやインタビューを基に整理



全141ページ
作成にあたり、下記の方々にご協力頂きました。

- ゴールドマン・サックス
- 三菱UFJリサーチ＆コンサルティング株式会社
- アンケート・インタビューにご協力頂いた方
  - Learning for Allの拠点に通う子ども・保護者
  - Learning for Allと日々活動を共にしている地域関係者（行政・学校・NPO等）

※使用したアンケート票、インタビュー項目、調査の仕方等も掲載しています！

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

すべての子どもが自分の可能性に気づき、最大限に発揮できる。
そんな社会を実現させるために、私たちは走りつづけます。

子どもの貧困に、本質的解決を。

Learning for All

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

参考文献

・志賀信夫「社会福祉と子どもの貧困―投資アプローチとwell-beingアプローチ」『教育政策学会年報』25巻、2018、pp115-125。

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

子どもの貧困に、本質的解決を。

Learning for All

NPO法人Learning for All

～Learning for All の活動から見えるもの～

目次

1. 自己紹介

2. Learning for All の子ども支援

3. 現場から見えてきたこと

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

自己紹介

Learning for All

特定非営利活動法人 Learning for All
子ども支援事業部マネージャー

※複数の地域の統括責任者（つくば、戸田）

多田　理紗

2011年　大学生当時、LFA関西事業部に参画

2014年　webマーケティングシステム企業入社
コンサルティング営業に従事。

2016年9月　転職し、LFA復帰
学習支援事業部
プログラム統括(複数拠点の責任者)に従事。

2018年　子ども支援事業部マネージャー

ひとこと

- これまで出会ってきた子どもたちから学んできたこと、子どもの権利が尊重されない社会を目の当たりにして憤ってきたこと全てが今の自分の原動力。
- 地域で子どもの育ちと学びを保障する仕組みをつくりたい。

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

目次

1. 自己紹介

2. Learning for All の子ども支援

3. 現場から見えてきたこと

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

Learning for All

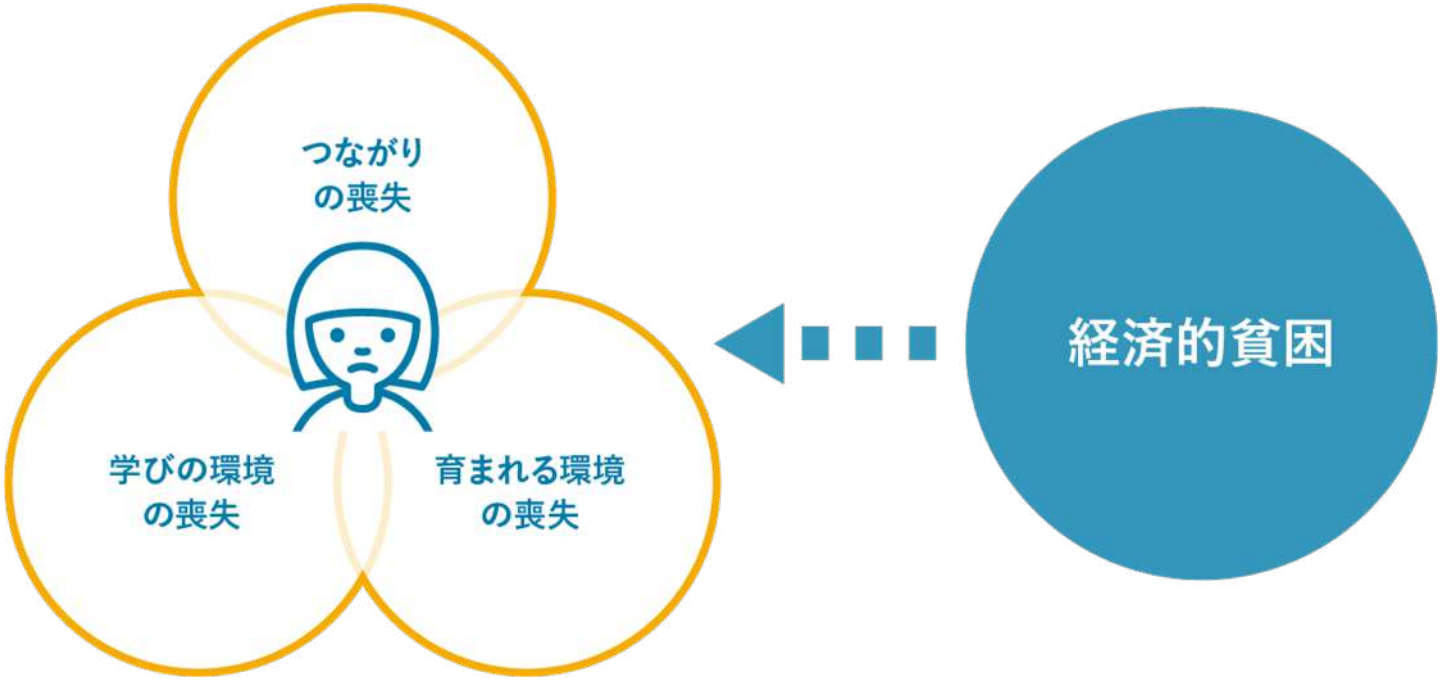
このように、むしろ経済的な基盤がないことを背景として、

本来子どもたちの健やかな育ちに必須である

「つながり」「学びの環境」「育まれる環境」を喪失しやすい

ということが、

問題を複雑にし、自立を阻む大きな障壁となっています。



Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

Learning for All

つながりの喪失

貧困・不登校・虐待などの様々な事情から、家庭や学校の中で安心できる居場所がない。不安なことやしんどいことを相談する相手もおらず、自分を支えてくれる友人や、NPO等の支援先とのつながりもないため、孤立してしまっている。

学びの環境の喪失

学校以外に学習する環境がなく、自分に適したペースと方法で学びを進めることができない。その結果、学習におけるつまずきを重ね、大きな学習の遅れを抱えてしまっている。さらに、自信も失い、自分の可能性を信じて将来の進路や夢を描くことができない状態に置かれてしまっている。

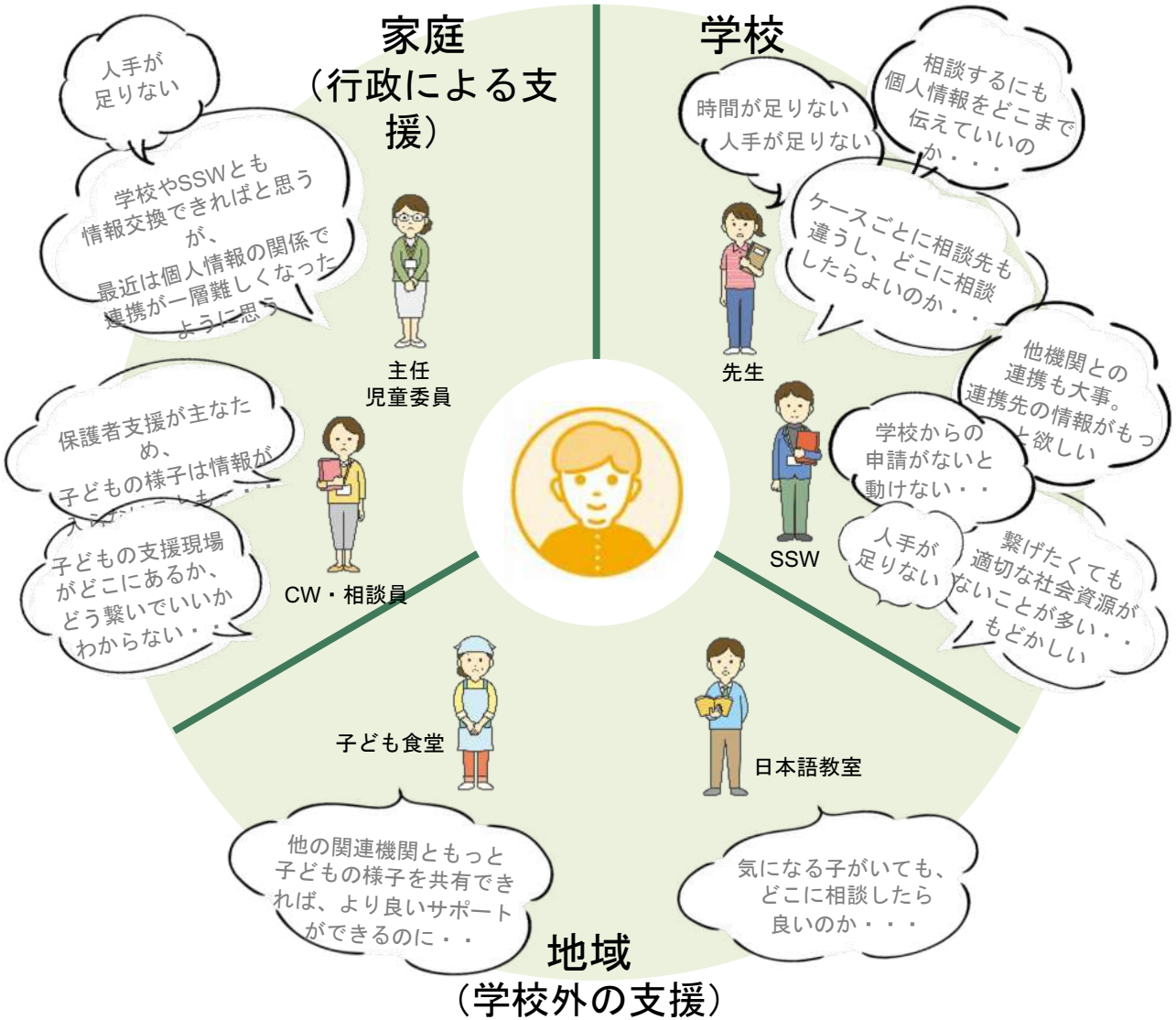
育まれる環境の喪失

虐待を受けたり、不適切な養育環境に置かれたりしている。そのため、心地よい環境で適切なケアを受ける、基本的な生活習慣を身につける、めいっぱい遊ぶといった「当たり前」の機会が得られていない。こうした状況では心身を成長させることができず、学習以前の段階で様々な課題を抱えてしまっている。

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

Learning for All

子どもを繋げ・支える大人達の限界が聞こえてきました



Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

2. Learning for All の子ども支援

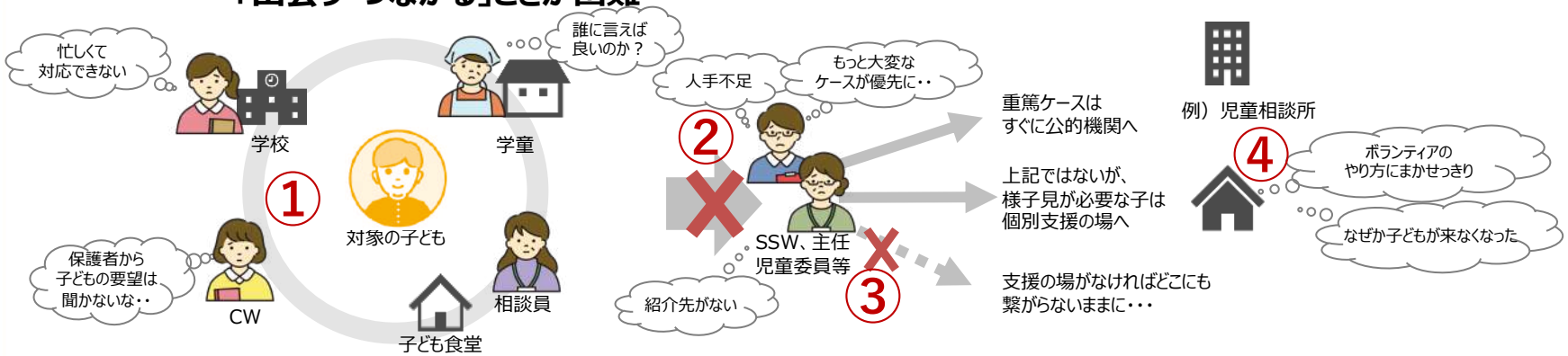
子どもや周囲の大人たちの状況をより知る中で、「子どもと早期に繋がれない」「子どもを適切に支えることが困難」という課題と、その背景が見えてきました。

子どもが支援につながる前

子どもと適切なタイミングで（早期に）「出会う・つながる」ことが困難

子どもが支援につながった後

子どもを適切な内容と質で「支える」ことが困難



① 困難な状態に置かれている子どもに気づくのが難しい

（例）
- ✓ 世帯支援を主とする相談員が、子どもの状態まで把握していない場合

② 困難な状態に置かれている子どもに気づいても、誰に繋げればよいのか・繋げてよいのかがわからない

（例）
- ✓ 何か問題が起こったわけでも、緊急なケースでもないため、相談するのに躊躇ってしまう。または、忙しくて対応できない
- ✓ 個人情報に気を付けて、どういうルートで誰に言うべきかわからない

③ 子どもを繋げたい支援先がなく、繋がらないままになってしまう

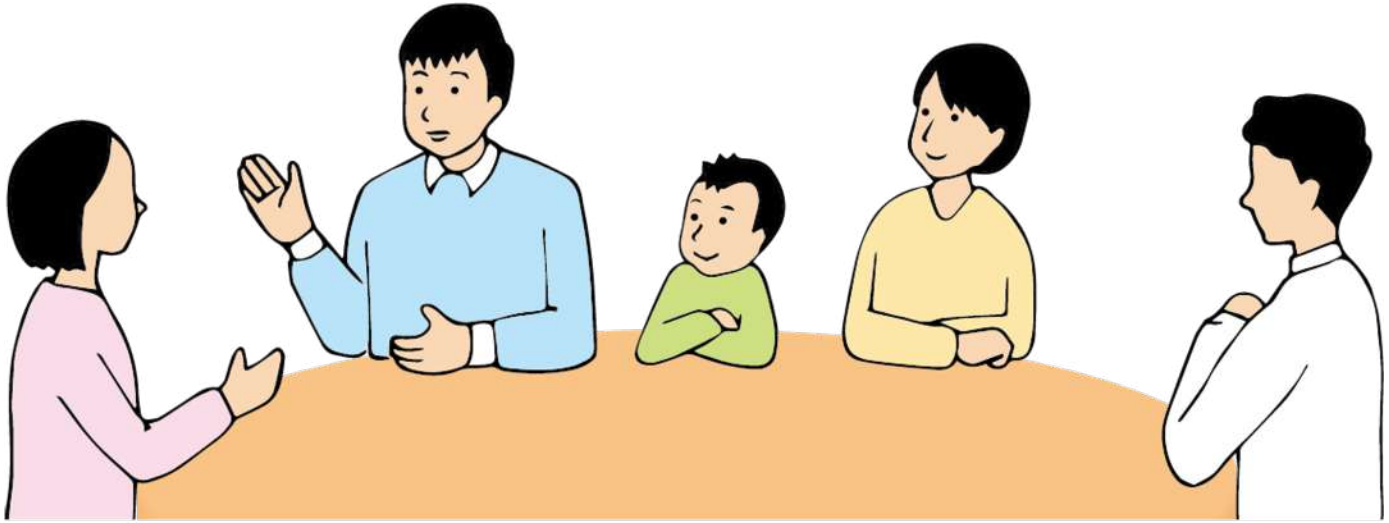
（例）
- ✓ 個別支援ができるような場が必要だが、集団を預かる先しかなくて断念

④ 支援先に繋がったとしても、子どものニーズに沿った支援かは不透明

（例）
- ✓ 学習支援に通っているが学習遅滞が解消されない
- ✓ 支援先に数回通って来なくなってしまった
- ✓ 学習以前の対応が必要な子どもに学習指導を行ってしまう

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

そこでLearning for Allでは、
その地域の子ども達の課題やニーズに応じながら、
子ども達が早期に支援に繋がることができる地域作りを開始しました。

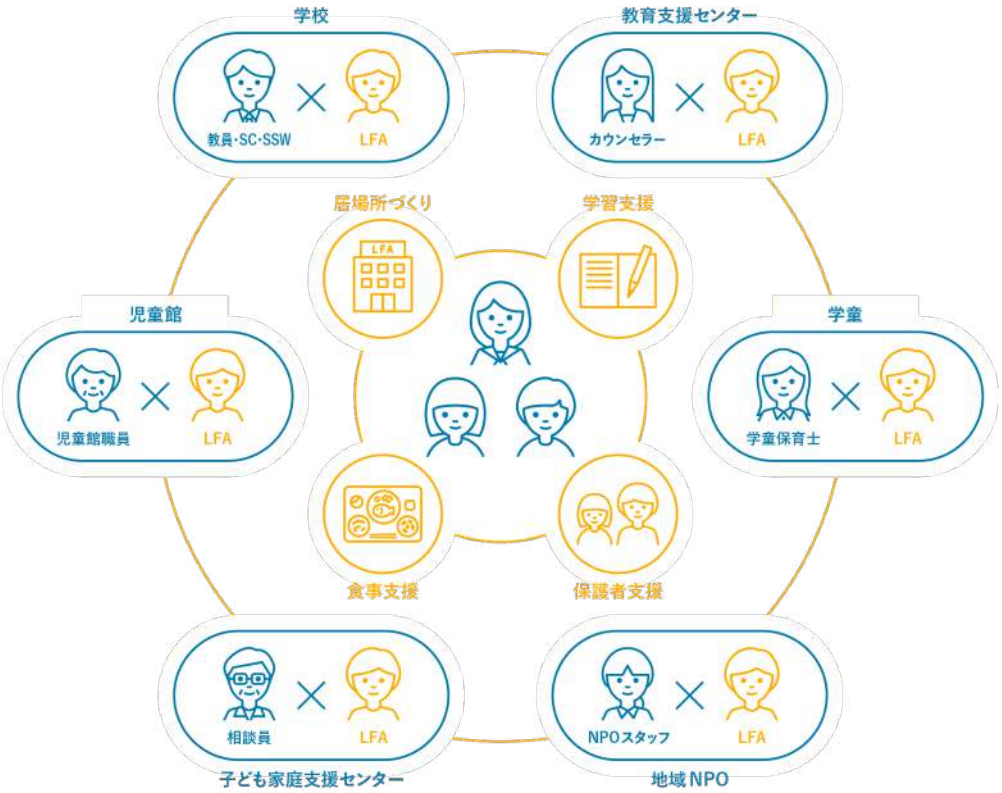


Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

Learning for All

「地域協働型子ども包括支援」の実践

地域のあらゆる立場の大人たちのネットワークをつくり、
支援の必要な子どもを見のがさず、早期につながる。
成長段階に合わせ、必要なサポートを6～18 歳まで切れ目なく行う。
そんな「地域協働型子ども包括支援」を展開しています。



地域の大人の
支援ネットワーク作り

×

子どもたちへの
包括的な支援提供

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

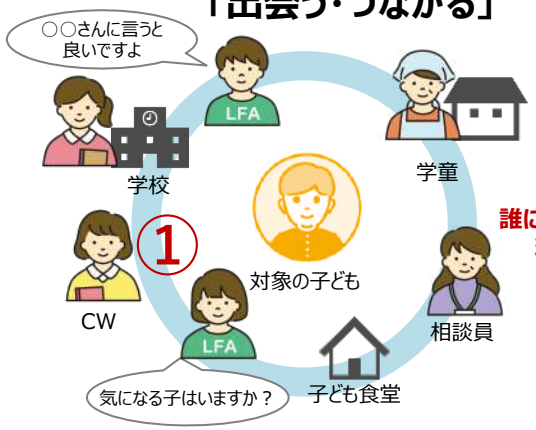
2. Learning for All の子ども支援

Learning for All

地域協働型子ども包括支援の実践を通じて「出会う・つながる」/「支える」の課題に対応してきました。

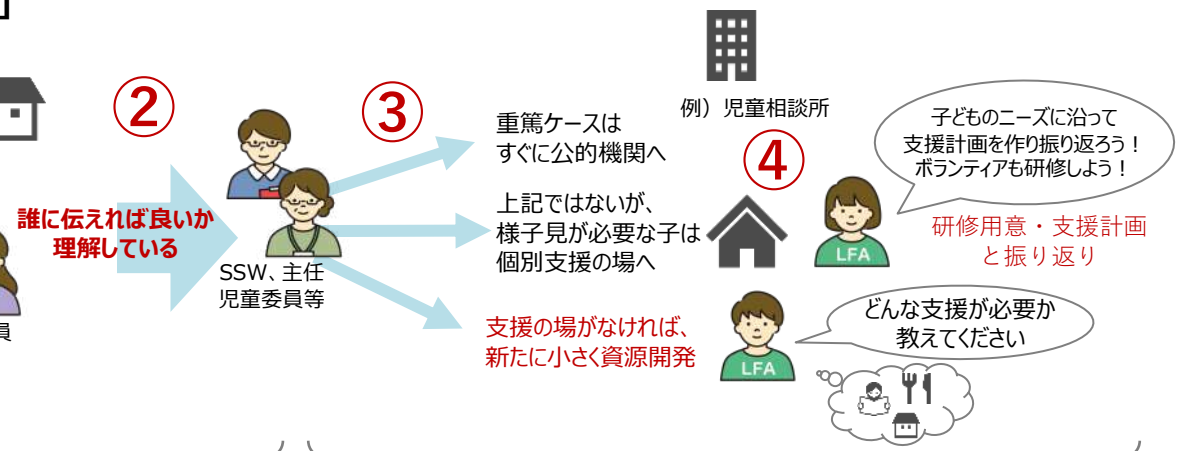
子どもが支援につながる前

子どもと適切なタイミングで（早期に）「出会う・つながる」



子どもが支援につながった後

子どもを適切な内容と質で「支える」



① 困難な状態に置かれている子どもに気づく

（例）
- ✓ 世帯支援を行っている相談員等に、子どもの支援ニーズがないか確認
- ✓ 認識を合わせるために具体的な子どものイメージを共有して確認

② 困難な状態に置かれている子どもを誰に繋げればよいのかがわかる

（例）
- ✓ 定期的な関係構築を通じて、顔の見える関係性を築き、「ちょっと気になる」という状態でも気軽に相談してもらえるようになる
- ✓ 繋げるべきケースであれば、個人情報に気を付けて、どういうルートで誰に言うのが良いのかを紹介

③ 子どもを地域資源に繋ぐ＋子どものニーズに沿った支援先を新しく開発

（例）
- ✓ 地域になければ新たな資源を小さく開始（居場所支援、訪問支援等）

④ 子どものニーズに沿った支援提供ができているか振り返りを徹底

（例）
- ✓ 学習遅滞の解消、生活習慣の学びなおし等、子どものニーズにそって支援計画を作成
- ✓ 子どもの変化を見ながら定期的にスタッフ・ボランティアの振り返りを実施
- ✓ 必要に応じて心理士やソーシャルワーカー等の専門家にも相談

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

2. Learning for All の子ども支援

Learning for All

子ども支援の運営 と **大人達の連携** を地域の中で進めてきました。

■主な連携・協力先
自治体の福祉部、母子自立支援や子ども相談等の公的相談窓口、小中高校、スクールソーシャルワーカー、ケースワーカー、民生児童委員、NPO、町会など

【子ども支援の運営】

- 6～18歳の子ども達を対象に、子どもの課題やニーズに応じて、柔軟に支援を変更・拡充
- ふらっと来れる居場所、登録制の子ども食堂、学習遅滞解消の学習支援など幅広く実施

【大人達の連携】

- 自治体と個人情報の授受が可能な協定書を結んでいる場合は、公的にアウトリーチを実施
- 上記ができない場合は、個人情報を侵害しないように公的組織を経由して対応。“あと一歩”周囲の大人が子どもをつなげるために動く声掛けを主に実施

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

Learning for All

LFAの提供する支援メニュー

６～１８歳の子どもの状況に合わせ
地域に根ざした形で幅広い支援内容を柔軟に展開しております。

居場所づくり（小学生）

学習支援（学校内）

居場所づくり（中高生）

学習支援（公民館）

食事支援

保護者支援

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

Learning for All

居場所づくり事業

小学１年～高校３年生の子どもたちに、安心して過ごせる居場所を提供する事業です。

基礎的な生活習慣が身についていない子ども、複雑な家庭環境により人との接し方がわからない子ども、発達障害を抱える子どもなどに、個別の子どもの課題や強み、保護者の状況にあわせた個別の支援計画をたて、一人ひとりに寄り添った支援をしています。

小学生の居場所

生活習慣の学び直しや遊び・学習サポートとして、
学童保育のような形で週5日運営。

中高生の居場所

不登校や家庭・学校に居場所がない
子どもを対象に週3日運営。

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

Learning for All

LFAの居場所づくりの特徴

①健やかに育つ基盤づくり

手洗い・うがいや歯磨きといった基礎的な生活習慣を身につける支援、宿題の見守りなどによる学習のサポート、栄養バランスの整った夕食の提供、最大21時までの預かりをしています。

③多様性を認め合える仲間づくり

専門性・経験豊富な常勤スタッフが、子どもたちの感情に寄り添い一緒に考えながら、様々な困難を抱える子どもたちがお互いの多様性を認め合えるような働きかけをしています。

②一人ひとりの魅力が輝くサポート

それぞれの子どもにある課題や特性にあわせて支援計画を作り、それぞれの強みを活かす支援を行っています。
子どもたちの自己肯定感を高めるために、
彼らが制作した作品の展示やプリントのファイリング、素敵なアクションを褒めるカードを送るなど、
子どもたちの強みを可視化しています。

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

Learning for All

学習支援事業

小学校４年～高校３年生の子どもたちを対象に、地域や学校と協力して

無償の「学習支援拠点」を設置しています。

大学生教師たちが、学習遅滞を抱えた子どもたちに寄り添って勉強を教えています。

学校内学習支援

学習遅滞の解消を目的とした1対3の担任制の指導。

週1回×3か月のプログラムを年4回実施。

公民館学習支援

不登校・日本語に難等、学校での個別対応が難しい子を

対象に週2回の1対1の個別指導を実施。

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

Learning for All

LFAの学習支援の特徴

①学習の「質」へのこだわり

大学生のボランティア教師はLFA独自開発の量・質ともに充実した研修（約40時間以上）を必須受講。フィードバックにあたるスタッフを配置し、指導の振り返りを徹底することにより常に授業のやり方や教材を改善。教師１人に対して生徒１～３人の、一人ひとりに寄り添った個別指導を展開しています。

②確実に成果を出すために

生徒が確実に学習で成果を出せるよう、プログラム中は同じ教師と生徒たちで行い、３か月を区切りとした継続的なプログラムを提供しています。
信頼した教師と安心できる学習環境は、生徒の確実な学習効果に繋がります。
※夏は短期集中プログラム（５～７日間）

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

2. Learning for All の子ども支援（コロナ禍の取り組み）

Learning for All

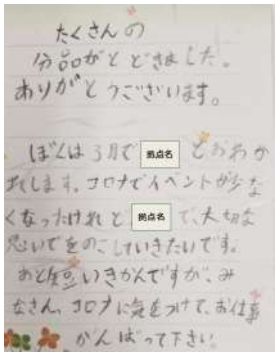
コロナ禍を受けて、昨年度より
「生活物資支援」「保護者の相談支援」「オンライン・オフラインでの学習・居場所支援」を強化

1 生活物資支援

食材・マスク・アルコール消毒などを
最低月1回生活必需品を支給

169世帯
へ支給

1,446回
の支給

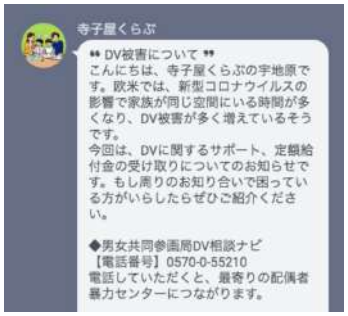


2 保護者の相談支援

専門家の監修を受けながら
個別相談支援を実施

2,008回
の支援

100世帯
を対象



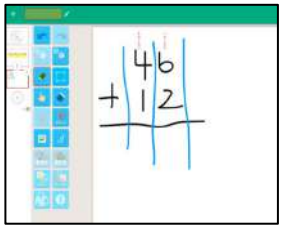
◀ LINEを活用した相談支援を実施。LFAからの支援情報等の情報発信とともに、保護者からの相談のハードルも下げている。

3 オンライン/オフライン 学習・居場所支援

タブレットの配布等の**学習環境の整備**
オンライン・オフライン授業

オンライン支援
1,785回

オフライン支援
1,835回



Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

目次

1. 自己紹介

2. Learning for All の子ども支援

3. 現場から見えてきたこと

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

Learning for All

実際に活動をする中で出会った子ども

Aさん（当時小学１年生）

- 生活保護
- ひとり親
- 発達障害
- 母親は精神疾患で通院
- 不登校(長期間)
- 母親の体調不良で欠食・育児放棄あり
- 母親の体調次第でどの機関とも連絡が断たれる

関わっている大人

行政　※複数
（こ家セン・生活支援・障害福祉）

小学校

スクール
ソーシャルワーカー
（SSW）

かかりつけ医
・
訪問看護職員

- ✓ 要保護児童対策地域協議会でのケース検討会議が定期的に開催されている
- ✓ 世帯に対して定期的に行政・学校・SSWから介入や関わりをすることはあっても、定常的に世帯に対して見守りができるわけではなかった

世帯として繋がりのある機関は複数あるが
定常的な世帯の見守りの場がない状態

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

Learning for All

実際に活動をする中で出会った子ども

＜LFAの拠点に繋がった当初＞
・母親の体調に拠点への出欠が大きく左右されていた

・その後母親とも連絡がつながらなくなり、拠点の利用が長期間遠のいた
（行政・学校・SSWも母親と連絡が途絶え、生活保護担当課の入金連絡時やかかりつけ医の診療時のみが接点となった）

・母親の体調良好時、連絡がつくようになり、その後訪問看護職員との外遊び習慣を経て、LFA拠点利用も再開した

・利用再開当時は表情が乏しく、また、毎日毎日癇癪を起こしていた

・スタッフからは以下の経験を届けることを大切にし、関わりを続けた

①自分の気持ちを受けとめてもらう経験

②癇癪が起きていても起きていなくても、どんな状態でもあなたであると肯定され続ける経験

③自らがもつ意見が肯定さ れ、大人との対話を重ねて場の意見として反映される経験

④他者との関係性の中で、他者を思いやって行動に起こすという経験

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

Learning for All

ある日の関わりの中で

自分の思うように事が進まないと
暴力や暴言が出る

暴力じゃなくて
相談してくれたらいいんだよ

何があったの？
そういうことがあったんだね。
あなたはそう思ったんだね。

どうしたい？一緒に考えよう。

【関わりを通して学んだこと】
・一回の介入で落ち着くことはない。
　一貫して続けること暴力暴言に至る気持ちや事情に耳を傾け、受け止めること
・そういう大人であることを示し続けること

【数ヶ月後・・・】
A：自分の感情を暴力ではなく、泣くことや言葉でスタッフに訴え、表現することが出来るようになってきた
（事情を理解して対応してくれる、とスタッフを信頼できるようになってきたためと推測）

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

Learning for All

ある日の関わりの中で

OOOをやりたい！

自分のやりたいことを言葉で
表現できるようになる。
一方で、他の子どもと意見が合わない
と暴力や暴言に出てしまう。

（「暴力には応じない」と伝えつつ）
どうしてそれをやりたいの？

どうしたら他の子も一緒に
楽しめるかな？Aは何をする？

なんて伝えたらAの考えてることが
伝わるかな？

【関わりを通して学んだこと】
・言動に対してすぐに評価をせず、当人が何を望んでいるのか耳を傾け、当人の良さが輝くよう働きかけること
・交渉や相談をする大人がいることと、大人の力ではなく自分の力で現状を変えられるという経験を続けること
・当人の役割を自分で見つけられるよう働きかけること

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

Learning for All

関わりを続けていく中で

- だんだんと表情が生き生きしてきた
- 当該児童にとって、安心できる安全基地であり、自己表現ができる場であり、自己実現に向かおうと思える場となることができたのではないかと考えている
- 今では、大人との1対1の関わりだけでなく、同世代の友達同士の関わりを求める段階までくることができた
- 一方で、大人からの関わりの度合いによって子どもの持つ力を奪っているかもしれないという葛藤もある

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

Learning for All

活動を通して出会った大人の仲間たち

「地域協働型子ども包括支援」を地域で作っていく中で
たくさんの大人のリーダーシップと変化、連携がありました。

連携を始める上で	• 包括的な支援をしていく上での学校の役割 / 意義 • LFAのビジョンに共感してくれた校長先生の存在、広がる共感の輪 • 学校・SSW・母子支援センター・こども家庭支援センター・地域の民生児童委員と連携のあり方について協議
連携を進める中で	• 行政とすでに繋がりの子どもに対して、LFAと協働しながら支援を厚くしていく • ほぼ全ての子どもと繋がりの学校の力を活かし、ニーズのある子どもを繋げてもらう • 支援につながった子どもたちの変化を目の当たりにするうち、積極的に世帯に働きかける教員が現れ始める • LFAと在籍校の間でのケース会議、役割分担の実施 • 学校との連携における、あるべき支援の形について継続的な対話 / 改善の実施

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

Learning for All

活動を通して出会った大人の仲間たち

「地域協働型子ども包括支援」を地域で作っていく中で
大人たちの連携について学んだこと

①子どもが変化し成長する拠点をしっかり運営する

②上から目線ではなく、子どものニーズと支援者の現状の努力を尊重した上で、必要な支援を共有していく

③人が変わっても、仕組みが残ることを意識する

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

Learning for All

まとめ

子どもは自分の人生を全うする主体である。
支援や関わりの中で子どもを「支援を受ける」存在として固定化することなく、
子どもの声を聞き、子ども自身の選択やあり方を尊重する。

地域の大人・資源が共有のビジョンに基づき、それぞれの強みを活かしながら
協働をしていくことが子どもへの支援の可能性を大きく広げる。

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

すべての子どもが自分の可能性に気づき、最大限に発揮できる。
そんな社会を実現させるために、私たちは走りつづけます。

子どもの貧困に、本質的解決を。

Learning for All

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

子どもの貧困に、本質的解決を。

Learning for All

NPO法人Learning for All

～Learning for All で活動する大学生の声～

自己紹介

特定非営利活動法人 Learning for All
子ども支援事業部　インターン

松村磨季

東京大学教養学部2年。大阪府出身。
高校時代に教育に関心を持ち、大学1年の夏にボランティア教師として葛飾区の学習支援プログラムに参加。以後、学習支援拠点で現場管理スタッフとして関わり続ける。

1.Learning for All に参加した経緯

参加したきっかけ

①自分自身の置かれた環境に目を向ける機会が少ないことへの疑問
　→教育って何のためにあるのかを”現場を通して”考えたい。

②教育を受ける機会が用意されていない子ども達に対して何かできることがないか

活動を続けている理由

①子どもの目線に立ちながら、一人ひとりに合った学びを届ける現場を作りたい。

②自分も含めて、一緒に活動するメンバー（大学生）が自分の”当たり前”を振り返る機会を作りたい

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

2.Learning for All での活動内容

子どもと向き合う

- ✓ 子ども一人ひとりに合わせた学習の支援（カリキュラム、指導案の作成等）
- ✓ 子どものニーズや困りごとを受け止める
- ✓ 長期的な支援で子どもがどうなりたいかを一緒に考える

子どもに寄り添う大学生を支える

- ✓ 授業を行うボランティアの指導準備 / 子どもとの関わりにおける課題解決のサポート
- ✓ ボランティア向けの研修の設計・運営
- ✓ 担当拠点のチームビルディング

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

3.印象的だった子どものエピソード

Aさん

・通学状況：中学校2年生。中1の終わりからいじめが原因で不登校になる。
現在は適応指導教室に通っている。

・家庭環境：ひとり親家庭、生活保護を受給している。

・繋がったきっかけ：生活保護のCWer経由で紹介を受ける

・良いところ：好きなこと、やりたいことを自分で表現して努力できる

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

3.印象的だった子どものエピソード

【周囲の人との関わり】
- ✓ いじめの経験がトラウマになり、 周囲との交流を否定的に捉えていた
- ✓ 「コミュニケーション力をつけたい」と思ったときに実践できる場所があった
- ✓ 過去の経験をリフレームするきっかけになった

【子どもの声に寄り添った学びの場】
- ✓ 子どもの「やりたい！」という声を元に実験を設計した
- ✓ 教師に教えること、手を実際に動かすことを通して彼女は理科の知識を身につけていた

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

4.活動を通して学んだこと

①子ども一人ひとりに寄り添うことの実体験
- ✓ 今この子どもが必要としているのは何なのかを考える葛藤
- ✓ 実際に生き生きと振る舞っている様子を見る喜び

②子どもの声が受け止められる現場の重要性
- ✓ 機会があるだけでなくそこに信頼できる人間関係があること
- ✓ 子どもそれぞれのタイミングで実現できる場所があること

③多様な学びの機会の保障
- ✓ 一つ一つの教育現場が強みを生かして学びを届けること
- ✓ 「当たり前」に気づいた上で子どもの声を拾うこと

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

5.大学生としてのこれからの自分

LFAでの経験を通して大学生として
学んでいきたいことも見つかっていきました。

・多様な教育の機会に子ども達が繋がるためにはどうすればいいのか

・子どもが自分に合った学習の仕方を見つけるためにはどうすればいいのか

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.

6.最後に

活動を考えている大学生の皆さんへ

Copyright © 2021 Learning for All All rights reserved.